特定非営利活動法人
タンチョウ保護研究グループ会誌
2010 年 3 月

もくじ

ご挨拶・・・・・・・・・・・・1
タンチョウ総数調査が行われました ・・・・・・・・・・・・2
韓国訪問～越冬数調査参加と飼育繁殖施設見学～ ・・・・・・・・・3
俵橋湿原プロジェクト続報・・・4
東北地方に現れているタンチョウ・・・・・・・・・5
標識物語　第８話・・・・・・6
事務局だより・・・・・・・・・8

ご挨拶

理事長　百瀬邦和

この冬も釧路にはタンチョウや冬の釧路湿原を見るために大勢の人達がやってきました。近年は台湾や中国，韓国など外国から見える方も多くなっています。

国の内外を問わず、北海道東部（道東）以外では野生のタンチョウを目にする機会はごく限られているのですから、野鳥ファンならずとも道東が魅力的なのは確かでしょう。多くの場合、タンチョウを見る場所は人為的に準備された給餌場に集まっている場面に限られています。ただし、最近のように人馴れがすすんできたとはいっても、給餌場にいるのはタンチョウの暮らしの中の一面でしかありません。

給餌場で間近に見るタンチョウはもちろん奇麗ですが、自然の中から切り取ってきたという印象はぬぐえません。一方、比較的遠くからとはいえ、釧路湿原や周辺の自然の中で生活しているタンチョウを見るのは、何度見ても新鮮に感じます。できることならば、自然の中で暮しているタンチョウの美しさを多くの人に見ていただけるように、場所や機会を考えていきたいものです。またそのようにタンチョウと共存していくことを目指す地域の姿勢が、タンチョウそのもの以上に地元の財産となっていくでしょう。タンチョウ保護研究グループがそうした活動の一翼を担えるように努力していきたいと思っています。

タンチョウ総数調査が行われました　松本文雄

2010年1月21日から1月31日まで、毎年恒例のタンチョウ総数調査が行われました。これは北海道のタンチョウの生息数をなるべく正確に把握するために、1985年から行われている調査です。厳冬期に越冬地で終日調査を行い、各地域の越冬数を推定して、冬の生息総数を調べるというものです。冬期はツルが集まるために数が数えやすいということで始まった調査ですが、近年は越冬地も広範囲に広がり、1週間以上かかる長期調査となっています。

今年は天候に恵まれ順調に調査が進みましたが、例年よりも積雪が多く、雪の中を探索する担当の人は大変だったようです。４１名、のべ１２３人の方がボランティアで調査に参加してくださいました。この場を借りて御礼申し上げます。

調査中に移動したツルや調査後に新たに見つかったツルもいるため、現在、慎重に調査結果をまとめている途中ですが、昨年よりも総数が少なくなるかもしれません。ただし、本当にタンチョウの生息数が減ったとは断定できず、単に調査の網にかからなかったツルがいるだけなのかもしれません。実際、今冬には過去３年の間、姿が確認できなかった標識鳥が給餌場に現れました。残念ながら、私たちの知らないどこかで越冬しているツルがいるようです。今後は調査体系の改善を図っていく必要があると感じています。

調査風景
（標茶町）

総数調査に参加して　斎藤葉子（白糠町立庶路小学校教諭）※

１月２４日、鶴居村の鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリで行なわれた冬のタンチョウカウント調査に初めて参加させていただきました。この日は天気がよく、雪で一面真っ白な給餌場がとてもよく見渡せます。風も無く、寒さを除けばカウント作業には絶好のコンディション。十分な厚着をしてきたつもりでも、日差しがほんのり温かくても、じっとしているとやっぱり体は冷えていきます。道東の自然･冬の厳しさを肌で感じました。この中で野生の動物たちがたくましく生きているのかと思うと、本当にすごいことだと思わずにはいられません。

１０時ころ､給餌場に最初のタンチョウが現れ、のんびりエサをついばんでいましたが、お昼を過ぎると、１５０羽近くのタンチョウで、どんどん給餌場がにぎわってきました。カウント作業もあわただしくなり、「飛来！」「飛去！」の言葉が飛び交います。はじめはなかなか声を発することができませんでしたが、班長さんの助け舟でタイミングをつかみ、「飛来！」と言えたときは、うれしかったです。

夕方４時をまわるころ、タンチョウがねぐらに帰って行きます。何を合図にしているのか、集団で一気に飛び立って行くのにはびっくりしました。それにしても、夕暮れの空に飛び立っていく姿もまた美しく､忘れられない光景になりました。

すっかり日が沈んだ５時過ぎ、最後の集団が飛び立っていきました。給餌場から全てのタンチョウがいなくなると、再び静かな給餌場にもどります。また次の日、たくさんのタンチョウたちがエサをついばみ、華麗なダンスをくりひろげて命をつなげていくのかと思うと、自然の摂理の不思議さをしみじみ感じました。

今回のカウント調査への参加で、特別天然記念物であるタンチョウを丸々１日じっくり観察する機会を得ることができました。こんなにたくさんのタンチョウを私たちが身近に目にすることができるのは、タンチョウを見守り、支えてこられた方々のご尽力があってのこと。これからもタンチョウたちが安心して暮らせる自然が続いていくように、私たちにできること、しなければいけないことを考えていかなければいけないと考えさせられました。

※釧路市動物園で教員長期社会体験研修中

韓国訪問 ～越冬数調査参加と飼育繁殖施設見学～　　正富欣之

2010 年 2 月 18 ～ 25 日に韓国へ行ってきました。今回の訪韓目的は、越冬数調査を体験（見学）し、タンチョウの飼育繁殖施設を見学することです。18 日の夕方に韓国に入り、19 日には韓国ツルネットワーク代表のリー・キサップ博士とともに、ソウルから自動車で漢江（ハンガン）沿いを通り、タンチョウがねぐらとして利用している紅華(カンファ)島の干潟まで行きました。そこで 10 羽程のタンチョウの索餌を観察した後、鉄原（チョルウォン）の民間人統制地帯（CCZ）内にある、名前が「タンチョウペンション」というゲストハウスに移動しました。

翌朝、参加者 30 人が 2 ～ 5 人の 9 班に分かれ、自動車で各班に割り当てられた地域を巡回する方式で調査を行いました。記録方法は、地図に家族・個体数・幼鳥数等をタンチョウとマナヅルで記号を変えて（タンチョウを三角、マナヅルを丸）記入するというやり方です。ツルは主に水田の落ち穂を索餌している様子で、私の班では 88 羽のタンチョウを確認しました。調査は午前中で終了。昼食後にミーティングがあり、各班の結果報告、状況説明と集計作業が行われ、合計でタンチョウ 693 羽、マナヅル 1,725 羽が確認されました。

鉄原の水田にいたタンチョウ家族（車が近付くと逃げる）

21 日には、漣川（ヨンチョン）で地元の方 2 名と合流し、総勢 7 名が 2 台の車に分乗し、前日と同様に巡回してツルを数えました。この調査中に、水位の変化によりツルのねぐらが無くなる可能性があると言われるダムの建設現場を見ることができました。その上流河岸の畑の刈跡では、マナヅルが数十羽の群れで索餌していました。最後に、非武装地帯（DMZ）が見える高台に登り、北朝鮮側にいるタンチョウ 4 羽をスコープで確認して調査を終了し、2 班で確認したタンチョウは計 82 羽でした。この日の夕方、鉄原へ食事に出掛けたついでに野生生物の保護施設を訪れ、保護されているタンチョウ、マナヅル、クロハゲワシ、コノハズクなどを見てきました。

22 日の午後に大邱（テグ）へ KTX（韓国高速鉄道）で移動し、23 日には、慶北大学校教授のパーク先生の研究室を訪問。その後、先生の車でタンチョウの飼育繁殖施設へ行きましたが、そこには 2 番いの成鳥と 1 羽の幼鳥が飼育されており、番いは 2008 年 10 月に岡山の自然保護センターから寄贈されたものです。幼鳥は、そのうちの 1 番いが産んだ卵を昨年施設で人工ふ化し、育てているものです。この施設では、ケージ毎にカメラを設置して

韓国で人工ふ化した幼鳥

24 時間録画を行ない、飼育下のタンチョウの行動を記録し、解析を行っているそうです。また、将来的に飼育個体数が増加することを想定し、新たな施設を建設する構想があり、その予定地も見学させていただきました。そこは、川の中州を湿地化する自然再生事業地の川岸にあり、パーク先生によると、韓国では自然再生や野生生物の保全に多くの問題点はあるが、解決策を見出し、より良い方向へ進めていきたいとのことでした。

今回の韓国でのツル類の個体数調査は、リー博士の多大な努力と熱心なボランティアの方々の協力によって成り立っており、また、パーク先生のツルの研究と保護に対する情熱も大いに伝わってきました。我々もより一層努力し、皆さんの御協力をいただき、タンチョウの保護、調査、そして研究を行っていきたいと思います。

俵橋湿原プロジェクト※続報　百瀬邦和

２月に当地での活動を一緒に進めていく「中標津の自然を知ろう会」のメンバーと初めての話し合いを持ちました。これまで標津湿原としてきたところは標津川下流全体を指し、私たちが活動を進めている標津川と支流である武佐川とに挟まれた範囲は「俵橋湿原」と呼ばれていることがわかりました。

俵橋湿原は面積が約 500 ヘクタールあり、2008 年に農業者の組合が営農を中止し，管理者である中標津町ではその後の土地利用については白紙状態であること、また現地では開墾前の 1981 年と 82 年に植物の調査が行われていることなどが報告されました。次の集まりでは当地での活動についてのマスタープランを話し合うことになっています。今年春から、中標津の自然を知ろう会のメンバーと共同で、自然環境の調査を始める予定です。

タンチョウ保護研究グループは、タンチョウが自然状態で生息できる湿原を確保すること、人と距離をおいたタンチョウの冬季給餌場をつくること、を目指しています。現在行なっているデントコーン畑の耕作とニオ作りは後者の一環です。俵橋湿原でのニオ作りまでの様子は前号で報告した通りですが、ニオには一つがいのタンチョウが継続してみられました。しかし、今冬の根室北部地方は例年以上の積

俵橋湿原のニオに来ていたつがい

雪があり，中標津での最大積雪深は平年の 42cm に対して 67cm にもなりましたので、昨年と同じサイズに作ったニオは根元が雪で埋まってしまうことが度々でした。ニオの中に入れるデントコーンを補給に行った際、根元部分を掘り出さなければならない事態となりましたので、今後はニオを大きくして中に入れるプラスチックバケツの下に台を置き、底上げすることで積雪対策とする必要がありそうです。

自動給餌型ニオの採食跡。
ツルの足跡が
多数見える。

今冬は道立根釧農業試験場から、試験栽培されたデントコーン約 100kg の提供を受けることができました。この件はデントコーンの刈り残しをお願いしている地元の農家から紹介され、北海道自然環境課に手続きを調整していただきました。試験場からは今後も継続して提供していただけそうなので、次年度からはニオ設置の際の補給用デントコーンがまかなえるでしょう。

一方、俵橋高台のデントコーン畑で刈り残しをお願いしていた畑では、竹竿３本を束ねて芯棒にしたところに刈り取ったトウモロコシを吊るしてニオ様にしていましたが、降雪後には写真のように骨組だけになってしまっていました。もちろんツルが訪れた形跡もありませんでした。今年も吹き荒れた冬の嵐に飛ばされてしまったか、シカが茎ごと食べてしまったか、あるいはその両方かもしれませんが、次年度はよりしっかりした本格的なニオを併用するなどの対策が必要でしょう。

人馴れを排除した給餌法の確立にはさらなる試行錯誤が必要なようです。

ほぼ竹竿だけが残ったデントコーンの束
（俵橋高台の刈り後の畑で）

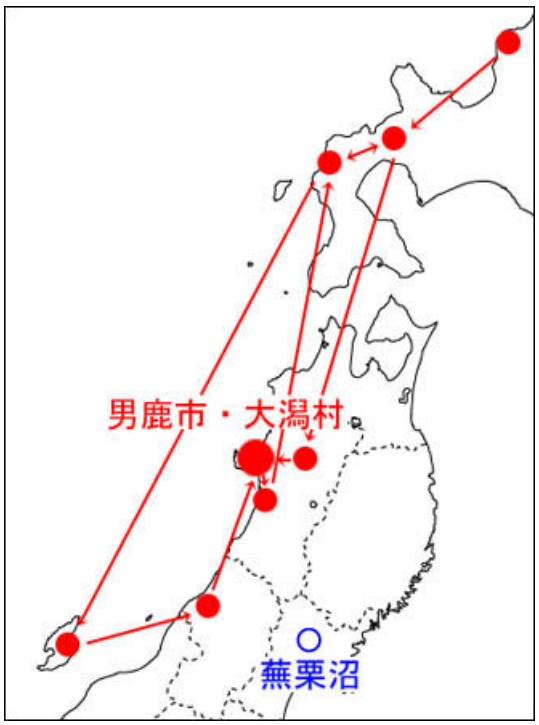
※前号までは「標津湿原プロジェクト」としてお伝えしてきました。

東北地方に現れているタンチョウ　　松本文雄

秋田県にタンチョウが現れたことを「TANCHO 7号」でお伝えしました。このタンチョウは現在（2010年３月）も秋田で見られます。このように道外で長期間に渡っての滞在は珍しいことです。

このタンチョウは2008年３月に北海道石狩市で最初に確認されました。まだ、首や風切羽に茶色が残る子別れしたばかりの若鳥でした。その後、道内を移動して、５月２日までは北海道蘭越町に居たことが分かっています。

５月10日になって秋田県北秋田市に１羽のタンチョウが現れ、体の特徴から北海道にいたタンチョウと同じであると認定されました。５月下旬には西に位置する男鹿市に移動し、男鹿市と、その隣の大潟村の農地などで過ごすようになりました。



秋田のタンチョウの移動経路（●）

男鹿市は多くの自然が残っているところです。大潟村は八郎潟の干拓によってできた一大稲作地で、ガンカモ類の越冬地です。この地域では減農薬に取り組んでいて自然の餌がたくさんあります。タンチョウはここの環境が気に入ったようで、カエルやドジョウを食べながら夏を過ごしました。冬になって移動するのではないかと思われましたが、水の溜まった田んぼや水路でタニシやザリガニなどを食べて越冬しました。

秋田のタンチョウ：加藤均氏撮影

春になって動き始め、2009年４月上旬に秋田市に移動した後、北海道南部や新潟県佐渡市でも見つかりましたが、山形県鶴岡市を経由して、５月29日には再び男鹿市に戻ってきました。そのまま、男鹿市と大潟村周辺で暮らし、この冬もふたたび越冬しました。

このタンチョウは北海道で最初に発見されたことから、北海道のタンチョウが移動したと考えられましたが、落とした羽根を拾ってＤＮＡを調べたところ、いままで知られている北海道産のタンチョウのものと一致しないことが分かりました。断定はできませんが、大陸から飛来した可能性が高いと考えられています。

秋田への飛来当初から地元の有志の方や鳥獣保護区管理員、環境省東北地方環境事務所のアクティブレンジャーの方々が観察を続け、さまざまな情報が集められています。さらにはこのタンチョウを見守ることを目的として昨年秋に「秋田タンチョウ友の会」が結成されました。地元の人たちはタンチョウが自然環境豊かなこの地域を選んで暮らしているという考えから、安易な餌付けなどはせずに自然の中でタンチョウが暮らせる環境を守り、地元農業との共生を目指しています。

2010年１月には宮城県の蕪栗沼にも別のタンチョウが現れ、滞在しています。ここもガンカモ類の一大越冬地で、冬期湛水水田※や減農薬に取り組んでいる水田地帯です。環境保全型の農業によって、自然が豊かになり、タンチョウのような大型の鳥類も暮らしていけるようになっているのかもしれません。地元の人たちは長年の取り組みの成果の表れとしてタンチョウの飛来を喜んでいます。稲作への農業被害の心配などもあり、単純に喜んでばかりともいきませんが、タンチョウと共存してほしいと願っています。

※冬期間に水を張った田んぼ。水鳥の越冬地になると同時に水鳥の糞や水中に棲む生物の働きで田んぼの生産力も上げます。「ふゆみずたんぼ」とも呼ばれています。

第８話　親子の絆 !?（T25 と 025）

西岡　秀観

第５話で自分の子供ではない幼鳥の面倒を見たタンチョウを紹介しました。では、タンチョウはいつ頃まで親子を認識しているのでしょう？　今回は、子別れ後の翌シーズンも親を認識していたと思われる観察例を紹介します。

今回の主役は、T25（1991 年生まれ、♂:写真１）と 025（2006 年生まれ、♂：写真２）の親子です。

写真 1:T25（2010 年１月）

写真２：025（2010 年１月）

これまで見てきた T25 の子供は、みんな甘えん坊ばかり。自力でエサを取れるのに、給餌場では親におねだりをする甘えた姿が多く見受けられました。025 も例外ではなく、子別れの時期（2007 年３月）を迎えても一緒にエサを食べていました（写真３）。この後は無事に子別れを果たし、他の若者たちと一緒に過ごしていました。

翌冬、給餌のシーズンに入った 2007 年 12 月に、それは起こりました。T25（この年は幼鳥を連れていない）がいつもの場所でエサを食べていたところ、後ろの方から見慣れたモノが近づいてきました。しかし、タンチョウは給餌場でもなわばりを確保するので、近づくモノを追い払います（写真４）。

写真３：T25（右）と 025（中）（2007 年３月）

写真４：025（右）を追い払う T25（左）（2007 年 12 月）

その近づいたモノとは、その年の春に子別れした 025 でした。追い払われた後も、025 は T25 と母親の周りをウロウロとしていましたが、T25 が近づくことを許しません（写真５～７）。結局この日、T25 は 025 が近づくことを許さないままねぐらへ帰って行きましたが、025 は諦めきれずに帰るときも付いて行きました（写真８）。

この時の親の行動は、自立させた子供に対して普通にあることなのですが、子供の方が１才を迎えてからここまで執着するところを、私は見たことがありませんでした。やはり甘えん坊で育ったせいなのでしょうか、「子別れ≠親離れ」を目の前で確認したような気がします。それまでの標識個体の親子関係から、子別れ後はもっとドライであるように思っていましたが、このような事例を見る

写真 5 ～ 7:親の周りをウロウロする 025（2007 年 12 月）

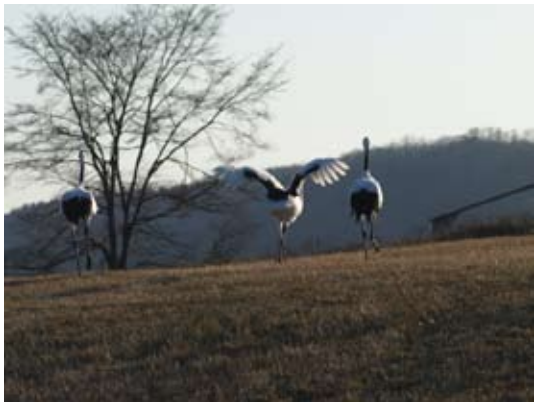


写真 8：T25（中）と一緒にねぐらに戻る 025（左）

と、やはり育てられ方によって性格に違いがでるのでしょうね。今回の結論は、T25 が 025 を認識していたかはわかりませんが、少なくとも 025 は T25 を認識していたと言って良いのではないかと思います。なぜなら 025 が他のタンチョウに執着して近づいたのは、この時だけですから。

紹介する話はこれで終わりにするはずだったのですが、今シーズン（2009-2010）この親子に新たな物語が加わりました。T25 は、繁殖地で子連れでいることが確認され、給餌場に無事連れてきました。繁殖成功の最高齢記録（１８才）を更新中です（写真９）。時を同じくして 025 も繁殖に成功していた

写真 9：T25 の家族（2010 年 1 月）

のでした（写真 10）。025 は 2006 年生まれの満３才での繁殖成功で、これは繁殖成功年齢の最年少タイ記録です。冬期の給餌場は、共に鶴居村を使用したので、T25 の子供（025 の兄弟）と孫（025 の子供）が、同じ年、同じ場所にいたことになります。

写真 10:025 の家族（2010 年 2 月）

次回は、第９話「ウチの娘たち。（017 他）」を掲載します。お楽しみに。

事務局だより

＜活動記録（2009 年 11 月～ 2010 年 3 月）＞

2009 年

11 月 6 日　運営会員連絡会

11 月 16 日　中標津町俵橋湿原でタンチョウ用のニオ作り

11 月 22 日　中標津町俵橋高台で刈り残したデントコーンを倒伏防止用に結束

11 月 30 日　会誌「Tancho」第 8 号発送

12 月 4 日　運営会員連絡会

2010 年

1 月 8 日　運営会員連絡会

1 月 16 日　タンチョウ総数調査説明会（於：釧路市民活動センター）、総数調査の班長打ち合わせ会議

1 月 21 ～ 31 日　タンチョウ総数調査

2 月 5 日　運営会員連絡会

2 月 8 日　俵橋湿原プロジェクトの準備会に出席（於：中標津町郷土館）

2 月 20 ～ 21 日　韓国の越冬ツル総数カウント調査に参加

3 月 10 日　運営会員連絡会

＜冬期総数調査余話＞

どこにいた？「T ５ ２」

標識したタンチョウの追跡調査は , 目視情報の収集で行われます。一部には、発信機を装着することで電波による追跡が可能な場合もありますが、ほとんどが標識番号を判読して確認しています。このため、ある程度の近距離でなければ個体識別ができません。今回、阿寒給餌場で " 再発見 " された T52 は、2005-06 年に阿寒で越冬した記録を最後に、確認されておらず行方不明でした。幼鳥の時から毎年のように阿寒で越冬し、高齢でもあったので、死亡説が考えられましたが、どっこい、生きていました。この個体が「T52」であることは、顔かたちではなく、標識番号が疑いようもなく証明しています。うれしい半面、調査不足が露呈したことでもあり、今後、ますますの情報提供をお願いしなくてはなりません。　（松本）

行方不明だった T52
（撮影：西岡秀観）

＜会員（3 月 18 日現在）＞

・運営会員　26 名（北海道 20 名、新潟県・神奈川県・東京都・兵庫県・中国・USA 各 1 名）

・個人サポート会員　133 名（北海道 73 名、長野県 14 名、東京都・大阪府各 10 名、兵庫県 6 名、神奈川県 5 名、千葉県 4 名、京都府・韓国各 2 名、茨城県・静岡県・愛知県・奈良県・石川県・島根県・フランス各 1 名）

・団体サポート会員　11 団体（北海道 9 団体、大阪府 1 団体、韓国 1 団体）

Tancho Protection Group (TPG) newsletter　TANCHO

Ninth issue　March 2010

＜表紙写真＞
厳冬期の標茶の自然河川の中でたたずむタンチョウのつがい
（2010 年 1 月：松本文雄撮影）

特定非営利活動法人
タンチョウ保護研究グループ
（編集：松本文雄）
〒 085-0036
北海道釧路市若竹町 10 番 2 号
Tel/Fax 0154-22-1993
e-mail: tancho1213@pop6.marimo.or.jp
URL: http://www6.marimo.or.jp/tancho1213